

コーパスを利用した「ノ」の過剰生成に関する考察

道本 祐子

1. はじめに

言語習得 (language acquisition) 過程の子どもは、身の周りの限られた経験 (資料) を一般化 (generalization) し、文法を獲得していく。¹ しかし、子どもはおとなの文法で文法的といわれる文だけではなく、文法的でない文まで生成してしまう一般化を行なうことがある。この一般化は、過度の一般化 (overgeneralization) ないし過剰生成 (overgeneration) と呼ばれ、子どもが身に付けている文法を反映したものと考えられる。

日本語の習得過程にある子どもの発話には、(1) のような過剰生成が見られることがある (以下、文前の * は、その文がおとなの文法では非文であることを表す)。

- (1) a. *アオイ ノ ウメ (岩淵・村石(1968))
b. *キイロイノ ハナ (永野(1960))
c. *カイジュウ ニ ナッタ ノ オンナ ノ コ (Harada(1984))

子どもの発話に挿入されるこのような「ノ」とは何かについて、1960年代から現在までに代表的な三種類の仮説がたてられてきた (本論では、便宜的に「準体助詞説」、「属格説」、「補文標識説」と呼ぶ)。近年では伊藤 (1999) が2名の子どもの縦断研究によって仮説を検証した結果、過剰生成の「ノ」は属格であると結論づけているが、なおも問題は残されている。

このように長年に渡り議論され、異なった仮説がたてられるのは、「ノ」に関するそれぞれの研究の手法が異なっていたり、データに制約があるため、議論に食い違いが生じたせいであると考えられる。言語獲得理論の構築において、その理論が発達事実と矛盾

¹ “acquisition” の訳語として、本論文では、おもに理論的側面を主張するときに「獲得」を用い、「発達の側面を主張する場合には「習得」を用いることとする。「獲得」と「習得」の使いわけについては大津 (1989) を参照。

道本祐子

するものであってはならず、言語習得の過程で出現する過剰生成についても、その出現のメカニズム、消失から大人の文法に至るメカニズムの両方が説明される理論が必要とされるが、先行研究で示されたデータは過剰生成発話を通して子どもの文法を研究するという目的に十分に応えるものではなかったと言える。

近年、コーパスを利用した言語研究が広く行われており、第一言語習得の分野でも CHILDES や JCHAT など公開されている子どもの発話コーパスを利用することで、子どもの語彙や文法の習得、認知能力の発達などを調べることが可能である。本論文では、言語獲得装置に基づく言語習得における「ノ」の過剰生成に焦点を合わせ、コーパスから収集したデータを用いて、その出現から消失を経て、子どもが大人の文法を獲得するメカニズムを考察する。また、文法獲得のメカニズムを網羅的に説明する理論の構築に向け、コーパスの利用可能性を述べる。

本論文の全体の構成は以下のとおりである。2節では言語獲得研究における過剰生成研究の目的について、本研究の理論的枠組みを示す。3節では「ノ」の過剰生成に関する仮説の問題点と、仮説検証に必要なデータについて述べる。4節ではコーパスを用いてデータの収集を行い、続く5節で、得られたデータを習得可能性と発達過程の両側面から分析し、実際に習得可能な文法理論を考察する。その結果、「ノ」の過剰生成について、「ノ」の出現初期段階では子どもの「ノ」がおとなの「の」とは異なっており、過剰生成の「ノ」については「準体助詞」の「ノ」との関係が強いことを示す(以下、子どもの発話に現れる「ノ」をカタカナで表記し、おとなの発話に現れる「の」をひらがなで表記する)。

2. 言語獲得研究

本研究では子どもの過剰生成および言語発達過程の観察を通して、子どもの「文法(言語知識)」²を研究対象とする。その獲得のメカニズムについては、入力と出力の性質を明らかにする必要がある。子どもは「入力」として生後接する情報を取り込み(経験(experience))、最終的に獲得するおとなの「文法」を「出力」するが、同一の言語共同体で最終的に獲得されるおとなの文法は本質的には均一であるといわれている。そこで、

²「文法」(grammar)とは、母語話者が脳に内蔵している言語知識であり、本論では、大津(1989)の定義に従って、「L語の話者(native speaker of Language L)がその脳に内在するL語の知識をL語の文法」(大津(1989: 4))とする。

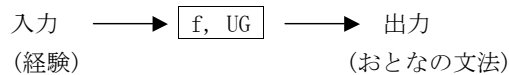
入力(言語経験)と出力(獲得される能力)の間に質的な隔たりがあるにもかかわらず、子どもが言語を獲得するという事実を説明するために、人間の脳内には(2)のような言語特有の獲得装置³があると仮定する(UG は普遍文法(Universal Grammar)である)。

(2) a. おとなの文法 = f (UG, E)

ただし、f: 文法関数

E: 経験

b.



(cf. 大津(1989))

(2)の獲得装置の具体的内容については、習得可能性(learnability)の点からと発達事実(development)の点から文法習得が論じられなければならない。発達の視点から現実の時間軸に即して言語機能を捉えると、誕生直後は初期状態(initial state) S_0 にある言語機能(UG)が、言語経験に触れるに従って S_1, S_2, \dots と徐々に変化し、おとなの文法 S_f に到達する。この過程を図式化すると(3)のようになる。

(3) $S_0, S_1, S_2, \dots, S_f, \dots S_f$

↓

UG(普遍文法)

↓

個別文法(おとなの文法)

(cf. 大津(1999))

言語習得過程にある子どもは、当該段階の文法に合致しないために処理されない(産出ないし、理解されない)言語資料を、次の段階では処理できるようになることから、子どもが言語資料のどのような特徴に注目して、現段階の文法のどの部分にどの程度の修正を加えて、次の段階に移行するのかという点を捉える必要がある。そして習得の各段階で現れる子どもの文法が、最終的なおとなの文法に至るまでの過程は、習得可能性を考慮した文法理論によって、なぜ、いつ、どのようにして習得が進行するのか、具体的なメカニズムが解明されなければならない。

本論文で論じる過剰生成も同様に、出現メカニズム、過剰生成の消失から大人の文法に至るメカニズムをあきらかにする必要がある。

³ 生成文法の言語獲得モデルでは、習得の先天的な面と後天的な面を認めている。

3. 「ノ」の過剰生成

3. 1. 三種類の仮説

(1)で示した日本語を母語とする子どもが行う過剰生成を「『ノ』の過剰生成」と呼ぶ。名詞(句)とその修飾要素の間に挿入されるおとなの文法では不要な「ノ」については、その種類をめぐって「準体助詞説」、「属格説」、「補文標識説」の仮説が立てられる。3種類の仮説のもとになるのは、日本語のおとなの文法での「の」の用法である。(4)から(7)に例を示す。⁴

(4) 準体助詞 [(名詞句の) 独立属格形]

- a. ママ の
- b. ヤマダ の

(5) 属格 [格助詞]

- a. ヤマダ の 本
- b. ここから の 道

(6) 準体助詞 [代名詞]

- a. 赤いの (赤いものの意味)
- b. 走っているの (走っているものの意味)
- c. こんな (こんなものの意味)

(7) 補文標識

どろぼう が 金 を 盗んだ の は ここからだ

三種類の仮説では、過剰生成が観察された期間の前後、あるいは同時期における(4)から(7)の「の」の出現順がそれぞれの仮説の主な論拠となっている。(8)から(10)に3種類の仮説をまとめる(以下、「<」は左辺が右辺よりも出現が先行したことを表し、「=」は同時期に出現したことを表す。また、「φ」は発話中におとなの文法で必要な「の」が現れていないことを示す)。⁵

⁴ 「の」の分類はMurasugi (1991)に基づくものであるが、Murasugi では「の」を(5)から(7)の3種類に分類している((4)は(5)に含む)。しかし、他の先行研究との関係で、(4)と(5)の属格を別に示す。日本語「の」については広く議論されており、何種類にどのように分類するのかが研究者により異なる(奥津(1974), 神尾(1983), 他)。

⁵ 永野(1960)と岩淵・村石(1968)、Clancy(1985)、伊藤(1998、1999)で観察された属格は「名詞(句)+ノ+名詞」における「ノ」である。

(8) 準体助詞説—永野 (1960) の観察

準体助詞 < 過剰生成 < 属格
 [独立属格形]、[代名詞]

(9) 属格説

a. 岩淵・村石 (1968)、Clancy (1985)、伊藤 (1998, 1999) の観察

属格 < (=) 過剰生成

b. 横山 (1990) の観察⁶

属格 < 準体助詞 [代名詞] < 過剰生成

(10) 補文標識説—Murasugi (1991) の観察⁷

過剰生成 = 「名詞 (句) +ノ+名詞」における属格「ノ」
 (随意的に出現)
 = 「後置詞句+φ+名詞」における属格「ノ」
 (* [_{NP (DP)} 東京から φ 電車])
 = ガ格、時制活用

過剰生成の種類については、過剰生成発話「*X+ノ+名詞」において、「ノ」が付加される名詞修飾要素(X)が(1a)と(1b)のような形容詞の場合と(1c)の動詞(関係節)の場合があり、少数ではあるが連体詞と形容動詞、指示詞の例も報告されている。⁸

このように子どもが行う「ノ」の過剰生成について、長年にわたり、異なった仮説が立てられ議論が収束しない理由としては二点考えられる。

⁶ 横山(1991)では、過剰生成に先行して、属格と過剰生成が生じた形容詞に付加された準体助詞「ノ」の出現を確認している。横山は「属格説」を主張しているが、過剰生成の「ノ」に準体助詞、属格の両方の影響があることを示唆している。

⁷ 生成文法、原理とパラメータ理論に基づく Murasugi (1990) の補文標識説では、子どもが過剰生成する「ノ」は補文標識の「ノ」であり、日本語を母語とする子どもは言語習得の初期段階では、英語と同じタイプの文法構造を持っているとされる。続く村杉・橋本(2004)においては、過剰生成は消失期間をはさんで二期にわたって生じると報告され、後期の過剰生成で生じる「ノ」が、補文標識であると仮説が修正されている。

⁸ 「ノ」の過剰生成が生じた名詞修飾要素については、永野(1960)と岩淵・村石(1968)、Clancy(1985)、伊藤(1998, 1999)が形容詞による名詞修飾の過剰生成を報告しており、Harada(1984) Murasugi(1992)では形容詞に加えて修飾要素が動詞(関係節)の場合を挙げている。横山(1990)のみが連体詞と形容動詞、指示詞が修飾要素である場合に生じた過剰生成の例を報告している。

道本祐子

第一に考えられるのは、過剰生成の「ノ」にそもそも複数の種類がある可能性である。報告されている過剰生成の期間に関しては、永野(1960)と Clancy(1985)では3カ月、伊藤(1998, 1999)の報告では2~3カ月の過剰生成の観察後、その消滅も確認している。一方で、横山(1990)は11~12カ月、Murasugi(1991)は16カ月と長い期間で過剰生成を観察している。また近年、村杉・橋本(2002)は子どもの過剰生成には質的、量的に二種類あり、過剰生成の観察期間は途中の消失段階を挟み、約6カ月間であった事を報告している。一般に、言語習得過程での1カ月の違いは大きいと言われており、当該段階の子どもの発話に出現する文法の種類や発話の量は大きく異なる。それぞれの研究で報告された期間の異なる過剰生成を一くくりにして論じることには問題がある。

第2に考えられるのは、「質的に異なったデータ」が混在している可能性である。子どもの発話から当該の文法を調べることを目的とすると、データとしては、言語外の要因による影響を最大限に取り除いた、可能な限り「子どもの文法を直接反映した発話」、あるいは「体系的な誤用発話」を扱わなければならない。しかし先行研究で提示されているデータには、研究法の違いから、子どもの文法以外の要因が関与した発話(例えば模倣語や、子どもの注意力や記憶力、神経質な状態が言語処理の制約となって引き起こされる発話)が含まれていることがありうる。

また、異質のデータが混在するのには、もうひとつの要因が考えられる。観察された発話に対する研究者の「判断基準」の問題である。言語獲得研究において、子どもの発話をどの段階で「文法を習得した」と見なすのかの判断は難しい(Brown(1973))。「正用の出現=習得」と見なすのか、またはどのくらいの頻度で正用が出現すれば習得したと見なすのかなどの発話に対する判断基準が異なっていれば、質的に異なる発話データの混在が生じる。「ノ」の先行研究ではこうした基準が明示されていないため、データの妥当性を判断することが困難である。

以上のふたつが、「ノ」の過剰生成についての議論が収束しない原因として考えられる。

さらに、上述の「属格説」伊藤(1998, 1999)は、三種類の仮説を実験と観察による縦断データにもとづいて一度に検証している。この点からは伊藤の研究が新たな試みとして評価されるが、仮説の検証法については問題が残されている。

伊藤によれば、「属格説」が正しければ過剰生成発話に先行して(あるいは同段階で)「名詞(句)+ノ+名詞」が出現することが予測され、「補文標識説」が正しければ複文の出現が過剰生成発話に先行することが予測される。しかし、伊藤のこの推論は成り立たな

い。なぜなら日本語のおとなの文法では(5)に示したように、名詞句内に挿入される属格の「の」には二種類あって、Murasugi(1991)は、「ノ」の過剰生成を行なう子どもの多くが、(5a)の「名詞(句)+ノ+名詞」では随意的に正しく属格を挿入し、(5b)「後置詞(句)+ノ+名詞」では属格の「ノ」の過小生成を行なっていたことを観察しており、それが「補文標識説」を主張する論拠の一つとなっている。したがって、伊藤が観察した過剰生成の前段階での「名詞(句)+ノ+名詞」は、属格説の予測、補文標識説の予測共に適切で、後置詞句での属格を観察しなければ仮説の妥当性が検証されないことになる。⁹ 伊藤の仮説の検討には、もう一点問題が残されており、それについては5節で述べる。

3節では、先行研究の多くが「過剰生成の出現から消失まで、大人の文法に至るメカニズムの解明」という研究目的からすると、断片的な記述と説明にとどまっていることを示し、仮説の検証にも問題があることを述べた。よって、過剰生成の過程ははまだ明確ではなく、いずれの観察事実をも包括しうる新たな仮説が必要であるといえる。

4. コーパス

4. 1. データ

本論文では、言語習得過程の子どもの発話に出現する「ノ」について、「ノ」の過剰生成に焦点を合わせ、コーパスから収集したデータを用いて、先行研究で論じられてきた三種類の仮説を検証する。分析対象は JCHAT ホームページで公開されている男児 2名のコーパス、AKI コーパス(以下、AKI)と RYO コーパス(以下、RYO)である。¹⁰ 3節での先行研究の検討から、観察項目は表1の8項目とする。

⁹ Murasugi(1991)では「*形容詞+ノ+N」の過剰生成だけでなく、「*動詞+ノ+N」(関係節)の過剰生成も確認していることに対し、伊藤ではこれを観察していない。関係節での過剰生成の観察も「補文標識説」を裏付ける根拠の一つである。

¹⁰ JCHAT の web サイトは <https://jchat.scc.chukyo-u.ac.jp/> である。RYO コーパスは約1歳3ヵ月から3歳1ヵ月(約 1;3-3;1)、AKI コーパスは約1歳5ヵ月から3歳0ヵ月(約 1;5-3;0)の縦断研究からなるデータである(Miyata(1992), Miyata(1993), Oshima-Takane & McWhinney(1998))。

道本祐子

表1 観察項目

	観察項目	発話例
1	過剰生成発話	「青いノうめ」、「黄色いノ花」
2	準体助詞〔名詞句の独立属格〕「名詞+ノ」	「ママノ」、「ぼくノ」
3	準体助詞〔代名詞〕 「形容詞、形容動詞、連体詞、動詞+ノ」	「赤いノ」、「へんなノ」 「走っているノ」、「こんなノ」
4	属格 ①「名詞（句）+ノ+名詞」 ②「後置詞句+ノ+名詞」	①「ぼくノほん」 ②「ここからノみち」
5	過剰生成が生じたX（形容詞、動詞、 形容動詞、連体詞、指示詞）	「ちいさい」「ちいさいほん」 「ちいさいノ」
6	「ガ」格 *1	「お父さんがいる」、「これがいい」
7	時制・活用 *1	「食べる」、「食べた」、「食べてる」
(8)	補文標識 *1	「どろぼうが金を盗んだのはここからだ」

*1 「補文標識説」の検証に必要な観察項目。「補文標識」の「ノ」そのものは、「補文標識説」の検証には必要ではない。

4. 2. 検索結果

表1の観察項目から「ノ」を含む発話をコーパスから検索したところ、AKIとRYOともに中心的な観察期間は約2～3歳(2;0～3;0)までとなった。それらを表1に従って分類し、初出の順を示したのが表2である。¹¹ なお、属格のうち、「後置詞句+ノ+名詞」発話は出現しなかった。

表2 「ノ」の初出順

初出順		RYO	AKI
1	準体助詞〔独立属格形〕 （「ノ」初出）	2;0.08	2;0
2	属格「名詞+ノ+名詞」	2;1.04	2;1.17
3	準体助詞〔代名詞〕	2;2.09	2;3.00
4	過剰生成	2;7.19	2;6:29
(5)	補文標識	—	2;9:00)

3 節で、先行研究で仮説の食い違いの理由として「判断基準」の問題を述べたが、本

¹¹ コーパスから収集した発話は、同一ファイル内での繰り返しや模倣発話、終助詞「ノ」を含む発話や「ノ」の分類が難しい発話を除いて分析を行った。

研究においても、この表1で示した各項目の初出後も頻繁に誤用が見られ、当該の項目が習得されているかどうかの判断が難しい。そこで分析の基準として Productivity Level System (Pレベル)を使用し、生産性の点から習得のレベルを計った。

本論文で用いる P4 レベルは各項目について、子どもが誤用をはさまずに異なった使用法で4回の使用した段階とする。¹² ただし、過剰生成が生じた X (形容詞、動詞、連体詞)については、各 X が名詞または準体助詞の「ノ」を伴って正用で4回出現した段階を P4 レベルに達したと判断し、属格では二つの名詞を異なった組み合わせで 4 回使用した段階を P4 レベルに達したと判断した。表2と表3では、属格と準体助詞〔代名詞〕の順序が入れ替わっている。

表3 「ノ」の P4 レベルに達した年齢

P4 レベルに達した順		RYO	AKI
1	準体助詞〔独立属格形〕	2;0.25	2;3.4
2	準体助詞〔代名詞〕	2;5.22	2.4.4
3	属格「名詞(句)+ノ+名詞」	2;6.5	2;7.19
(過剰生成の初出	2;7.19	2;6;29)

それぞれに出現した過剰生成について見ていくと、RYO の過剰生成は2才7か月後半(2;7.19)と8か月(2;8.08)に2例が観察された。AKI では2歳6か月後半(2;6.29)に出現(初出)し、2歳11か月後半(2;11.25)までに6例の過剰生成が観察された(3歳0か月までのファイルでは過剰生成の消滅は確認されなかった)。

三種類の仮説について検証してみると、まず表2からは過剰生成前後の「ノ」の出現順に着眼する限りでは、過剰生成の前に、準体助詞の独立属格形と代名詞が出現しており、「名詞+ノ+名詞」における属格の「ノ」も出現している。この観察は(9)で示した「属格説」の基となる観察に一致する。

また(10)の「補分標識説」について検討してみると、過剰生成が生じた時期に、RYO

¹² Miyata et al. (2004) で用いられた Productivity Level System (Pレベル)は、対象の文法項目を、子どもが異なった場面(言語環境)で新しい使用法(組み合わせ)で何回産出するかに応じてレベル付けされる。しかし、本研究では、各項目を含む発話の絶対数が少ないため、同じ発話ファイルであっても連続した発話と模倣発話を除外し、使用法が異なればカウントした。しかし、Miyata et al. (2004) が指摘しているように、この基準は生産性の面からの測定基準であり、誤用の分析や項目間の出現頻度の比較には対応しないことがあり、必ずしも適切とはいえないが、本論文ではコーパスから得られる発話を判断するために適当な基準と考え使用する。

道本祐子

と AKI とともに「名詞+ノ+名詞」における属格の「ノ」はすでに出現しており、過剰生成の前
後で P4 レベルに達している。随意的に属格を使用していた段階と言える。¹³ しかし、もう
一方の「後置詞句+ノ+名詞」における属格は観察されていない。時制や活用については、
RYO では「ガ」格の初出が2歳1カ月頃で、P4 レベルに達するのは2歳2カ月、AKI では
初出が2歳3カ月後半頃で、P4 レベルに達するのが2歳5カ月である。¹⁴ これらはいずれ
も過剰生成前である。しかし「ガ」格は「XX ガ イイ」、「XX ガ アル」など主語、述語の
いずれかが同じ発話で使われることが多く、誤用も複数見られることから、定着してい
たかどうかの判断が難しい。「時制・活用」に関しても、両者ともに過剰生成の前から正しく
使用する発話もあるが、特定の動詞、形容詞を一語発話(または終助詞を付加する形)
で使用することが多く、コーパスから判断することはできない。

最後に「準体助詞」説については、(8)で示したように永野(1960)が過剰生成の後に
属格を観察しており、この点では本研究とは異なる。しかし、過剰生成の初出の後も属
格が随意的であったことを考えると、この観察結果が永野(1960)の観察結果と矛盾する
とは言い難い。

本節では、コーパスを用いた研究によって、「ノ」の出現過程を観察し、過剰生成に関
する三種類の仮説の検証を行ったが、発達事実からみるとどの仮説も妥当であるように
見える。詳細な分析は次節で行う。

5. 習得可能性と発達過程

本節では、4節のコーパス研究から得られた「ノ」のデータと先行研究で提示されてい
るデータを、習得可能性の点から考察し、「ノ」の出現から大人の文法を獲得するまでの
メカニズムを考察する。

4節の観察は三種類の仮説のいずれにも該当するように見えるが、それぞれに出現
した過剰生成を見ていくと、そうではない。まず、AKI の過剰生成発話の例を(11)に示
す。¹⁵

¹³ RYO では、過剰生成が初出する前に「名詞(句)+ノ+名詞」における属格の「ノ」はP4レベルに達し
ているが、その後も誤用が見られるため、属格の「ノ」が定着していたと言うことはできない。

¹⁴ ガ格の初出について、子どもが「ガ」を明確に発音したのか、コーパスからの判断が難しい。

¹⁵ データの出典について、以下、JCHAT, AKI コーパスを「A」で示す。

- (11) a. *チッチャイ ノ カラス ワ (A, 2;6.29)
 b. *チッチャイ ノ ジテンシャ (A, 2;8.24)

2回の過剰生成が生じた形容詞「チッチャイ」については、最初の過剰生成が生じる前に P4 レベルに達しており(2;6.15)、(12)に示すように準体助詞「ノ」と名詞を伴う形で過剰生成の出現期間にも正用で出現している。

- (12) a. チッチャイ クレーンシャ (A, 2;4.4)
 b. チッチャイ ノ (A, 2;5.4, 2;6.15, 2;7.12)
 c. チッチャイ ジドウシャ ネ (A, 2;7.5)

RYO の過剰生成は動詞と連体詞に「ノ」が付加される二例が出現した。(13)で示す。¹⁶

- (13) a. *チガウ ノ ゴハン ワ (R, 2;7.19)
 b. *パパ コウイウ ノ コウチャ ノンデル (R, 2;8.08)

過剰生成の生じた2歳7カ月前では、動詞「チガウ」が(14a)で示すように、1カ月前で2歳6カ月前で準体助詞を伴って出現しており、連体詞「コウイウ」についても、過剰生成の前に出現している((14b)は同一ファイル内で(13b)に先行している)。しかし、P4 レベルを判定することができなかった。

- (14) a. リョウクン ノ チガウ ノ (R, 2;6.23)
 b. パパ ネー コウイウ ノー
 パパ コウイウ ノ (R, 2;8.08)

伊藤の研究(1992, 1993)では、「*形容詞+ノ+名詞」の過剰生成は子どもが「*名詞+名詞」(「*私(φ)本」)と「形容詞+名詞」(「赤い本」)で、修飾要素の名詞と形容詞の統語素性を混同してしまうため、属格挿入規則を過剰適用するという仮説が提案されている。したがって、伊藤の考えによれば、正しい統語素性を獲得すれば過剰生成は消滅することになる。

この仮説には、発達過程を検討すると二つの問題が生じる。まず一点目は、伊藤も述べているように、「*形容詞+ノ+名詞」以外の過剰生成を説明することができないという問題である。過剰生成が生じる名詞修飾要素は形容詞だけではなく、動詞(関係節)、連

¹⁶ データの出典について、以下、RYO コーパスを「R」で示す。

道本祐子

体詞や指示詞でも過剰生成が報告されている。この点について本研究では RYO から (13b) の過剰生成を観察し、この過剰生成は (14b) の発話の直後に観察されていることから、(13b) の過剰生成「*連体詞+ノ+N」が (14b) の「連体詞+ノ」から生じていることは明らかである。(11) と (13) で示した過剰生成についても、過剰生成が生じた名詞修飾要素が準体助詞「ノ」を伴う用法で過剰生成の前に出現しており、過剰生成の出現にはこれらの出現が影響を与えていると考えられる。

二点目の問題は「名詞+ノ+名詞」における属格の出現についてである。「名詞+ノ+名詞」は必ずしも伊藤が主張するように、「名詞+名詞」にノが挿入されて出現するのではないという点である。別の「名詞+ノ+名詞」の出現形態としては、「名詞+ノ」に「名詞」を追加することで「名詞+ノ+名詞」が出現することが考えられる。¹⁷ 本論のコーパス検索では、AKI から (15) のような「名詞+ノ」と後続の「名詞」の間に、切れ目と終助詞の「ネ」を挟む発話が見られた(以下、発話中の「#」は発話内の切れ目を示す)。

- (15) a. コレ ネ # オバチャン ノ プレゼント
 コレ ネ # オバチャン ノ ネ # プレゼント (A, 2;7.12)
 b. コレ ネ # スージー ノ ダイコン
 コレ ネ # スージー ノ ネ # ダイコン (A, 2;8.3)
 c. モノレール ノ ネ # センロ (A, 2;9.0)
 d. ジドウシャ ノ ネ # マエ (A, 2;9.14)

これらの発話は、「名詞+ノ+名詞」が「名詞+ノ」から出現していることを示唆している。これらの二点の問題と観察事実から、名詞修飾要素を X で表すと「X+ノ+名詞」発話が「X+ノ」から派生していると考えられる (X が形容詞と連体詞の場合は過剰生成であるが、名詞の場合は正用となる)。

また「X+ノ」の出現初期段階においては、(16) と (17) のような発話が観察された。

- (16) a. *オネエチャン φ ナ ノ [=お姉ちゃんのものなの] (R, 2;3.20)
 b. *アキチャン φ [=アキちゃんのもの] (A, 2;2.00)

(17) a. *オオキイ φ ミヨウ [=おおきいのをみよう] (A, 2;2.22)

¹⁷ 小村(1979)は「名詞(一語発話)」から「*名詞+名詞」を介さず、「名詞+ノ」から「名詞+ノ+名詞」に至る出現例を示している。

b. *アオ φ [=青いもの] (A, 2;3.00)

(16)と(17)の発話からは、子どもが「X」に「ノ」を付加することで、「X+ノ」を作っていると考えられ、「X」から「X+ノ+N」の出現過程をまとめると(18)のように示される。

(18) 「X」 → 「X+ノ」 → 「X+ノ+N」

それぞれの移行期(→)には過小生成である(16)と(17)の「*X+φ」や、(15)の「X+ノ」と「N」の間に「#」と「ネ」が挿入される発話も観察されており、子どもの「ノ」の出現過程では、子どもが少しずつ長い発話を作り、文法を修正しながら次の段階に移行していると考えられる。¹⁸

近年の言語習得理論では、子どもの持つ文法範疇がおとなの文法範疇と同じであるかという議論が広く行なわれており、子どもの初期の文法範疇がおとなと異なるものであれば、子どもの文法からおとなの文法に至る過程が説明さなければならぬ。ここで、この「X+ノ」の「ノ」がおとなの文法における「準体助詞」の「の」と同じかどうかは確かめておきたい。

3節で示したように、おとなの文法では準体助詞の「の」が二種類に分類され、(4)の名詞句の独立属格形では「名詞+の」には省略された主要部がある点で、(6)の代名詞とは異なる。しかし(16)と(17)の発話からは、子どもが「X+ノ」の初期出現段階では「X」の性質を理解していないことが窺え、この「ノ」はおとなの文法と同じ「の」ではないと考えられる。

本研究では、過剰生成発話「*X+ノ+N」の出現には「X+ノ」の影響が強いことを示し、子どもの言語習得の初期段階で出現する「ノ」はおとなの文法の「の」とは異なっていると考える。過剰生成の「ノ」についても同様に、おとなの文法範疇である「属格」、「準体助詞」、「補文標識」によって分類することはできないのではないだろうか。検証するためには、さらに詳細なデータと考察が必要である。

¹⁸ RYO からは2歳1カ月と2カ月に「ママ ノ # ハンバーガー (R, 2;1.04)」と「ママ ノ # オカネ (R, 2;2.23)」という発話が観察された。2歳0カ月の「ノ」の出現初期から、RYO の発話には「ママ ノ」が複数現れるため、「N+ノ」の影響だと考えられるが、その後2歳3カ月で(15a)の「*オネエチャン φ ナ ノ (R, 2;3.20)」が出現している。この発話は準体助詞[独立属格形]がP4レベルに達した後で生じた誤用発話で、この発話の出現過程にはさらに考察が必要である。

6. まとめと今後の課題

本論文では過剰生成の「ノ」の文法範疇について十分に論じることはできなかったが、「ノ」の出現過程の観察から、子どもの「ノ」が出現初期段階においてはおとなの文法の「の」とは異なると考え、過剰生成については、表面的には「X+ノ」という構文から派生している可能性を示した。しかし「X+ノ」がおとなの文法において現れる「X+の」と同じであるか、「X+ノ」を発話した時点での子どもの文法がどのような状態にあるか、どの段階でおとなの文法に変わるのかなどの問題が残されている。

最後に、今回使用したコーパスの問題点をまとめて、今後の課題とする。一点目として、コーパスを使った研究では特定の項目を容易に検索できるのと、複数の子どもの発達を短時間でみることができるのが利点であるが、本研究で観察の必要な項目が観察されなかった点に問題があった。子どもの自然発話の観察によって収集されたデータ(コーパス)では特定の構造の発話がめったに起こらないという一般の問題点がある。¹⁹ 例えば、名詞句の独立属格形「N+ノ」に比べ、「X(形容詞、連体詞、動詞)+ノ」の出現回数が少なく、この違いを子どもの生産性だけの問題で捉えることはできない。また、コーパスが収集された観察時以外に子どもが特定の発話を行なっても、発話の出現を確認できないことが問題となる。

二点目は3節でも指摘した発話の判断基準である。本研究では初出と P レベルを別にして発達過程を観察したが、複数の誤用や項目間の出現頻度の違いをどのように捉えるのか問題が残された。一点目で述べた問題もこれに関係しており、深刻な問題である。

三点目には観察期間の問題である。コーパスから抽出された発話は3歳までである。「ノ」の過剰生成は長期間に渡って出現する可能性がある。習得可能性を考慮した理論をたてるためには、過剰生成の出現から消滅までが確認できる期間のデータを収集しなければならない。これらの三点を解決するためには、広い年齢層の子どもを対象とした実験によって、子どもに特定のタスクを与え、発話を引き出すことが必要である。

以上が本論文での問題と今後の課題である。言語習得過程の子どもが当該段階の文法のどこを修正し、次の段階に移行するのか、子どもの初期の文法が、どのようにして、最終段階であるおとなの文法に至るのか、習得過程を説明できる理論の構築が最終的な目標である。

¹⁹ O'Grady (1997)を参照。

参考文献

- 伊藤友彦. 1992. 「『名詞+名詞』から『名詞+ノ+名詞』への移行」. 『静岡大学教育学部研究報告』人文・社会学篇第 39 号: 135-140.
- 伊藤友彦. 1993. 「幼児における「ノ」の過剰生成」. *Kansai Linguistic Society* 第 13 巻:118-126.
- 伊藤友彦. 1998. 「過剰生成される「ノ」のカテゴリー——幼児一例の縦断研究——」. 『東京学芸大学紀要』1部門 49: 143-149.
- 伊藤友彦. 1999. 「幼児 2 例に生じた『ノ』の過剰生成の出現・消失のメカニズム」. 『東京学芸大学紀要』1部門 50: 159-168.
- 岩淵悦太郎・村石昭三. 1968. 「ことばの習得」. 岩淵他(編)『ことばの誕生』: 110-177. 日本放送出版協会.
- 大津由紀雄. 1989. 「心理言語学」. 『英語学の関連分野』(英語学体系6): 181-361. 大修館書店.
- 大津由紀雄(編). 1999. 『言語の獲得と喪失』(岩波講座 言語の科学 10). 岩波書店.
- 大津由紀雄(編). 2002. 『言語研究入門:生成文法を学ぶ人のために』. 研究社.
- 奥津敬一郎. 1974. 『生成日本語文法論』. 大修館書店.
- 神尾昭雄. 1983. 「名詞句の構造」. 井上和子(編)『日本語の構造』: 77-126. 大修館書店.
- 国立国語研究所. 1951. 『国立国語研究所報告3:現代語の助詞・助動詞—用法と実例—』. 国立国語研究所.
- 小村晶子. 1981. 「所有表現の発達」. 堀素子・F・C パン(編)『言語習得の諸相』: 111-132. 文化評論出版.
- 柴谷方良. 1978. 『日本語の分析』. 大修館書店.
- 寺村秀夫. 1982. 『日本語のシンタクスと意味 第 I 巻』. くろしお出版.
- 永野 賢. 1959. 「幼児の言語発達について—主として助詞の習得過程を中心に—」. 『国立国語研究所論集1:ことばの研究』: 383-396. 国立国語研究所.
- 永野 賢. 1960. 「幼児の言語発達—とくに助詞「の」の習得過程について—」. 『関西大学国文学会: 島田教授古希記念国文学論集』: 405-418.
- 村杉恵子・橋本知子. 2002. 「幼児に見られる名詞句での二種類の過剰生成」. 『文部

道本祐子

- 科学省科学研究費補助金成果報告書:複合動詞と項構造～項構造の統語表示に関する比較研究』: 203-232. 南山大学.
- 横山正幸. 1988. 「幼児初期における所有の発話の理解の発達」. 『福岡教育大学紀要: 第4部教科教育編』37:175-186.
- 横山正幸. 1990. 「幼児の連体修飾発話における助詞「ノ」の誤用」. 『発達心理学研究』1(1): 2-9.
- Brown, R. 1973. *A First Language: The Early Stages*. Cambridge MA: Harvard UP.
- Clancy, P. 1985. "The Acquisition of Japanese." In D. I. Slobin. ed., *The Cross Linguistic Study of Language Acquisition. Volume 1: The Data*, 373-524. Hillsdale, N.J.: Erlbaum.
- Harada, K.I. 1984. "On the Acquisition of Japanese." 『金城学院大学論集: 英米文学編』25(104): 149-171.
- MacWhinney, B. 1995. *The CHILDES Project: Tools for Analyzing Talk, Second Edition*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- MacWhinney, B. 2000. *The CHILDES Project: Tools for Analyzing Talk, Third Edition*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Miyata, S. 1992. "Wh-Questions of the Third Kind: The Strange Use of Wa-Questions in Japanese Children." *Bulletin of Aichi Shukutoku Junior College* No.31, 151-155.
- Miyata, S. 1993. "Japanische Kinderfragen: Zum Erwerb von Form -Inhalt -." *Funktion von Frageausdruecken*. Hamburg: OAG.
- Miyata, S., Hirata, M., MacWhinney, B. & Oshima-Takane, Y., Otomo, K., Shirai, Y., Shirai, H., Sugiura, M. 2004. "Constructing a New Language Measure for Japanese: Developmental Sentence Scoring for Japanese (DSSJ)" In Otomo, K.ed., *Comparative Reserch for a Developmental Index for First and Second Language of Japanese and English*. Report of the Grant-in-Aid for Scientific Research (B) (1) (2001-2003) Supported by Japan Society for the Promotion of Science. Project No. 13410034. 1-59.
- Murasugi, K. 1990. "Noun Phrase in Japanese and English: A Study in Syntax, Learnability and Acquisition." Ph.D. Dissertation, University

of Connecticut.

O' Grady, W. 1997. *Syntactic Development*. Chicago: The University of Chicago Press.

Oshima-Takane, Y. and MacWhinney, B. (eds). 1998. *CHILDES Manual for Japanese*, Montreal: McGill University / Nagoya: Chukyo University.

Pinker, S. 1984. *Language Learnability and Language Development*. Cambridge: Harvard University Press.

